

かつての恋人

インターホンが鳴った。約束の五分前だった。慎吾は椅子から立って玄関に向かった。ドアを開けて客人を迎える。そこに立っていたのは、かつての恋人、香奈枝だった。

彼女は照れくさそうに笑みを浮かべて所在なさげに立っていた。久しぶりの恋人に会うのに、どんな顔をしていいのか分からない様子だった。

「やあ、久しぶり」

「お久しぶり」

二人は照れくさそうに言いあった。

「とにかく、どうぞ」

慎吾は香奈枝を中に促した。彼女は「お邪魔します」と言つて、靴を脱いだ。

客室に香奈枝を通してソファを勧めるが、香奈枝は部屋を見渡して、なかなか座ろうとしない。そこは普段女装サロンとして使っている部屋だった。彼女は興味津々のようだった。

「へえ、綺麗にしてるのね。こんな感じなんだ」

こんな感じ……というのが、女装サロンは初めて見た——という意味なのか、ただ単に部屋を見た感想を洩らしているだけなのか？　よくわからなかった。

「お茶でいい？」

「うん」

部屋中を見渡しながら香奈枝は頷いた。

慎吾は緊張しながらお茶を入れた。二〇年ぶりに会う恋人はすっかりと洗練された大人の女になっていた。あの頃はまだ二十歳で、もっと初々しい顔つきだったが、今はしっかりとした一人の女性だった。

たったひとりでリクを産んで育て、いろんな苦難を乗り越えてきたことは容易に想像できた。彼は改めて、その歳月の長さを噛みしめていた。あの時から、今の今までがあっという間に過ぎた気がする。

それは運命の日だった。DNA鑑定の報告書が届いた日だ。その結果を見て、慎吾は愕然とした。あの文字がトラウマのように彼の脳裏に焼き付いていたのだ。

親子関係である確率九十九・八パーセント――。